

看護実践研究センター報告書

平成29年度

目 次

I	はじめに	109
II	平成29年度事業報告	
1.	なごや看護生涯学習セミナー	109
	【看護研究セミナー】	
	(1)看護研究いろはの「い」	
	(2)看護研究いろはの「ろ」	
	(3)看護研究いろはの「は」	
	【看護実践セミナー】	
	(1)臨床場面における認知症高齢者との非言語的コミュニケーションスキルを磨く！	
	(2)重篤な肝障害・腎障害・代謝障害の病態と管理	
	(3)患者急変対応「何か変、と思ったとき…」	
2.	なごや看護生涯学習公開講演会	115
3.	地域連携セミナー	116
4.	看護研究サポート	117
5.	昭和生涯学習センター共催講座	118
III	今後の課題	119

名古屋市立大学看護学部
名古屋市立大学病院看護部

平成29年度看護実践研究センター運営委員会

センター長：明石 恵子（名古屋市立大学看護学部）
運営委員：小川 雅代（名古屋市立大学看護学部）
 小黒智恵子（名古屋市立大学病院看護部）
 小田嶋裕輝（名古屋市立大学看護学部）
 杉浦 和子（名古屋市立大学看護学部）
 原沢 優子（名古屋市立大学看護学部）
 益田美津美（名古屋市立大学看護学部）
 宮内 義明（名古屋市立大学看護学部）
 吉松 由子（名古屋市立大学病院看護部）
 脇本 寛子（名古屋市立大学看護学部）
事務職員：小林真理子

名古屋市立大学看護学部看護実践研究センター

〒467-8601
名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1番地
TEL & FAX：052(853)8042
<http://www.nagoya-cu.ac.jp/nurse/center/>

I はじめに

名古屋市立大学看護学部と名古屋市立大学病院看護部が協力して設置した看護実践研究センター（以下、本センター）は6年目を迎えた。しかし、その前身である看護学部地域貢献委員会における事業も含めると、看護学部と病院看護部の協働による社会貢献は12年目となる。本年度もこれまでと同様に地域貢献事業に取り組み、なごや看護生涯学習セミナー、なごや看護生涯学習公開講演会、地域連携セミナー、看護研究サポート、昭和生涯学習センター共催講座を開催することができた。そしてこれらは、本センターの目的をご理解いただいた講師の方々のご協力と、自らの興味関心やレベルアップを動機としてご参加いただいた皆様によって成り立っていることを改めて感じている。また、本事業の収支をみると、収入が増加傾向である。事業毎に参加人数の増減はあるが、事業全体では参加人数が増え、認知度が高まっているといえる。しかし、このような事業を安定して実施していくためには、漫然と継続するのではなく、新たな取り組みも必要である。

本報告書では、本年度の地域貢献事業の実績を報告するとともに、地域貢献事業を継続するための課題を述べる。

II 平成28年度事業報告

1. なごや看護生涯学習セミナー

担当：杉浦和子、脇本寛子、小黒智恵子

「なごや看護生涯学習セミナー」は、愛知県内の保健医療職者を対象に、より専門性を高め地域住民へのサービス寄与につなげることを目的とした地域貢献事業である。本年度は看護研究セミナー3件、看護実践セミナー3件を開催した。

1) 事業実施経緯

時期	内 容
4月	セミナー実施の承認・内容検討 テーマおよびセミナー担当者募集開始
5月	テーマ申込み状況の把握
6月	全テーマの開催日程、場所決定、教室予約 参加申込方法（メール申込、FAX申込）、受講証明書配布方法の検討 募集人数、受講料、応募結果案内方法の決定 チラシ作成、配布先・配布枚数・印刷枚数の決定と発注 受講カード、受講証明書の検討

時期	内 容
7月	看護実践研究センターホームページで告知開始 チラシ発送（病院、名古屋市保健所、老人保健施設、精神保健福祉センター、愛知県看護協会など合計140箇所） 参加者募集開始、受講生に受講カードの送付 セミナー当日の役割分担、アンケートの検討
8月	参加受付対応およびセミナー当日の役割分担表の作成開始 セミナー申込み締切（各セミナーの日程により申込み締切を延長） 事務へ領収書の依頼 情報処理室のパソコン使用IDカード準備（事務へ依頼）
9月 ～ 11月	各セミナー実施 実施前：受講者数の決定、受講者リスト作成、参加申込状況の報告、講師へ連絡、セミナー当日の委員の業務内容の概要説明、配布資料印刷 実施後：アンケート集計、看護学部ホームページへ開催報告掲載 【看護研究セミナー】 ・看護研究いろはの「い」 第1回（9/6） 第2回（9/13） ・看護研究いろはの「ろ」（10/7） ・看護研究いろはの「は」 第1回（10/24） 第2回（10/31） 第3回（11/14） 【看護実践セミナー】 ・臨床場面における認知症高齢者との非言語的コミュニケーションスキルを磨く！（9/2） ・重篤な肝障害・腎障害・代謝障害の病態と管理 第1回（10/20） 第2回（10/27） 第3回（11/10） ・患者急変対応「何か変、と思ったとき…」 (11/18)

2) 事業の実施状況

【看護研究セミナー】

(1)看護研究いろはの「い」

講 師：門間晶子（名古屋市立大学 看護学部・教授）
日 時：第1回 平成29年9月6日（水）
18時30分～20時30分
第2回 平成29年9月13日（水）
18時30分～20時30分
場 所：名古屋市立大学 看護学部棟 4階 410講義室
募集人数：30名
参 加 者：両日とも14名
参 加 費：2,000円



〈内 容〉

昨年度同様、1回あたり2時間の講義を2回シリーズで実施した。到達目標は、①看護研究の要素や進め方に関する基本的事項の理解、②日常の実践における疑問の文章化、研究疑問としての表現、③研究論文を読み、文献を検討する際の視点や考え方を具体的に理解、④文献検討の意義と基本的な方法の理解、⑤研究計画書の構成と要素についての理解の5点である。これに沿った講義やグループワークを行った。

1回目は、まず看護研究とは何かについて、看護研究の定義・特徴・役割等を解説し、次に、研究疑問(リサーチ・クエスチョン)とは何か、それを洗練するヒント、研究デザインとの関連について伝えた。続いて、問題意識の明確化から論文の公表に至る研究のプロセスの全体像を解説し、その最初のステップを丁寧に踏むことの大切さを伝えた。具体的にはワークシートを用いながら、「受講者が疑問をもった看護現象」、「問題だと感じている状況」を書き出してもらい、2～3人で組になってそれらを研究疑問の形で記述するにはどうしたらよいかを話し合ってもらった。2回目セミナーで使用する論文2点(量的研究・質的研究)を配付し、参考資料として文献クリティークのガイドラインを添付した。

2回目は、看護研究を読み・味わい・そこから学ぶために、前回配付した2件の研究論文を読んだ意見交換を行った。その後論文の種類、種別による査読基準の違いなどを解説し、学習につながりやすい論文を探すヒントにもつなげた。続いて文献検討・文献レビューに関する用語の定義、文献検討の目的、文献検索方法、絞込みのポイント、文献検討結果のまとめ方について解説した。時間の関係から、受講者の希望を聞き、目標②「リサーチ・クエスチョンの洗練」よりは、目標③「研究論文の読み方」に焦点を当てて進めた。最後に、研究計画書について、その役割、要素、作成例について説明した。特に量的な研究では重要となる、研究のねらいや方法、扱いたい事象を明確にするための「概念枠組み」の例を示

し、描くことを薦めた。

参加者の、研究に対する経験やニーズは様々のものであった。病棟での看護研究の使命を抱えている人も多く、看護研究の基本的事項をおさえたい一方で、少しでも研究を前に進めるための「リサーチ・クエスチョン」や「文献検討」に実践的に取り組もうとしたが、難しく感じた人もいたようであった。

〈アンケート結果〉

参加者14名のうち、14名から回答があった(回収率100%)。セミナー参加動機で最も多かったものは「職場の上司の勧め」7名(50.0%)で、次いで「チラシ」4名(28.6%)であった。また、セミナーの内容は「わかりやすかった」「どちらかといえばわかりやすかった」を合わせて12名(85.7%)と多数であり、一方「どちらかといえば難しかった」は2名(14.3%)であった。自由記載では、「レベルが高く、興味は持てたが理解は出来なかった」「研究への意欲がでた」など感じるレベルに差が見られた。この他、「文献検索や、研究テーマの絞り込みの段階で普段の疑問からどのように進めてよいかわからなかったが、少し考え方がわかった」「看護研究は思いつきで行うのではなく一貫性をもって計画的にすすめていくものだ」と改めて学ぶことができた」という感想があった。

(2)看護研究いろはの「ろ」

講 師：樋口倫代

(名古屋市立大学 看護学部・教授)

金子典代

(名古屋市立大学 看護学部・准教授)

日 時：平成28年10月7日(土) 9時00分～16時10分

場 所：名古屋市立大学 看護学部棟 4階 401情報処理室

募集人数：20名

参加者：16名

参加費：3,000円



〈内 容〉

今年度も昨年度同様、量的研究を行う際のサンプリング、データ収集、入力のプロセス、SPSSを用いた統計分析に関する講習を行った。午前、午後の一日をかけてのプログラムとし、前半の午前の部では、量的研究を行うにあたって基本となる内容として、①疫学と統計学の位置づけ、②記述統計、③統計学的推論の基本、④疾病(事象)の頻度測定と比較の講義を行い、午後はデータ入力、SPSSを用いたデータ分析、基礎統計、単純集計、2項目の質的変数間の関係を見る分析、量的変数間の関係を見る分析に関する講義を行った。参加者のデータ分析経験は様々であることが考えられたため、個々のレベルに対応できるように内容を工夫した。概要は以下の通りである。

1) 疫学と統計学の位置づけ

量的研究における、疫学と統計学の位置づけ、および、研究においてどのように利用できるのかを概説した。

2) 記述統計

データの種類、および、データの種類による記述統計の方法について概説した。カテゴリデータについての頻度と割合、数量データについての平均、分散、標準偏差、中央値、標準偏差について例を挙げて解説し、使い分けについて説明した。

3) 統計学的推論

統計学的推論における、母数、標本、統計(値)の関係、標本抽出の基本的な考え方、標準誤差について概説した。さらに、推定と検定について、基本的な考え方、および、例を示した。検定に関しては、t検定と χ^2 検定について説明した。

4) 演 習

①調査実施のプロセス(エクセルを用いた事例データによる演習)

量的質問紙の調査の事例を想定し、サンプルサイズについての考え方、対象者の参加率の向上に向けた工夫、調査項目の作成、について基礎事項を説明した。次いで、調査実施、データ収集、分析のプロセスについて、特に調査票の回収とデータ・クリーニング、データ・コーディング(コーディングマニュアルの作成)、データのダブルエントリーと入力ミスを発見する方法について、あらかじめ用意したエクセル・データを用いて演習した。

②SPSSを用いたデータ分析

SPSSを使用して実施できる量的データの分析手法の説明を行った。事前に準備した模擬データを用いて、SPSSにより基礎統計量の算出、平均値の算出、群別の平均値の算出などを行った。またカイ二乗検定、t検定などの説明も行い、SPSSソフトウェアを使用する際にはどの数値を参考にすべきか、注意点も説明を行った。

データの解析方法は多くあり、ソフトウェアにより簡便に実施できるようになってきているが、研究のデザイン、得るデータにより用いる分析手法がまったく異なるため、研究計画の洗練に時間をかける必要性についても解説を行った。



〈アンケート結果〉

参加者16名のうち、16名から回答があった(回収率100%)。セミナー参加動機で最も多かったものは「職場の上司の勧め」の9名(56.3%)で、次いで「チラシ」4名(25.0%)であった。また、セミナーの内容は「わかりやすかった」「どちらかといえばわかりやすかった」を合わせると過半数の9名(56.3%)であり、一方「どちらかといえば難しかった」「難しかった」を合わせると6名(37.6%)であった。自由記載では、「午前の講義をもとに午後の演習でデータ入力を経験でき、今後の研究にいかせると思った」「SPSSの使い方を生に学びたいと思ったが、やはり使うには、疫学や統計学の基礎知識が必要であると思った」「知識を深める機会となった」「基本的なことを知らないで、スピードが早く感じた」「内容は基本的だったと思う」「用語の理解ができておらずスピードになかなかついていけなかったので、事前学習(知っておいた方が理解しやすいこと)を提示していただければより理解しやすかったと思った」という意見があった。

(3)看護研究いろはの「は」

講 師：樋口倫代

(名古屋市立大学 看護学部・教授)

金子典代

(名古屋市立大学 看護学部・准教授)

日 時：第1回 平成29年10月24日(火)

18時30分～20時30分

第2回 平成29年10月31日(火)

18時30分～20時30分

第3回 平成29年11月14日（火）

18時30分～20時30分

場 所：名古屋市立大学 看護学部棟 4階 402講義室

募集人数：10名

参加者：5名（各日程）

参加費：3,000円



〈内 容〉

今年度、はじめての試みとして、「質問票のデザイン」に関する講習を行った。

対象を「実際の調査が予定されているが、質問票作成の初心者である看護保健職者」とし、疫学的調査・研究における質問票作成にあたって留意すべきことを理解し、実際に作成してみることを目標に、3回（各2時間）の講義、演習を行った。

10名を定員としていたが、予想より少ない5名の参加であったため、受講者のニーズとレベルに合わせてフレキシブルに行なうことができた。

概要は以下の通りである。

1) 質問票のデザイン（講義）

10月24日（火）18：30～20：30（金子）

量的研究のプロセスを概説した上で、研究目的に沿った研究計画の立て方、データ収集ツールとしての質問票の作成、また質問作成にあたって留意すべきことを講義した。さらに、質問票のレイアウトの仕方や依頼文の書き方などについても説明した。

2) 演 習 1

10月31日（火）18：30～20：30（樋口）

研究の疑問を仮説にする、仮説に基づいて分析のフレームワークを作る、フレームワークに基づいて実際の質問を作る、回答をデータ化するためのコーディングマニュアルを作る、という一連の作業を演習した。まず仮想研究を用いて練習した上で、自分の行いたい研究で、仮説の明文化と分析フレームワークの作成を行った。各自の仮説とフレームワークを受講者と講師で共有してコメントしあった。

次回までの課題として、それぞれが質問票かコーディングマニュアルを作成して持参することにした。

3) 演 習 2

11月14日（火）18：30～20：30（樋口・金子）

2名と3名に分かれ、各グループを教員1名ずつが担当してグループディスカッションを行なった。それぞれの課題について、教員が個別のコメントとアドバイスを行なった。その質問票を作成した受講者だけでなく、他の受講者とも疑問や問題点を共有し、話あう形で進めた。



〈アンケート結果〉

参加者5名のうち、5名から回答があった（回収率100%）。セミナー参加動機は「インターネットのホームページ」「チラシ」「職場の上司の勧め」の順であった。また、セミナーの内容は参加者全員が「わかりやすかった」と回答しているが、同時に「どちらかといえば難しかった」という回答もあった。自由記載では、「講義前半は私の知識でついて行くのに苦しいものがありました。少数グループワークで、ほかの受講生の方の事例もいっぱい聞くことができ、先生のアドバイスも聞いて理解しやすかった」「統計学的な仮説検定の方法について正しい知識を学べたので今後に生かしていきたいと思った」「具体的にわかりやすく学べたのでとてもよかった」「忙しい中でのグループワークの課題はやや大変でしたが学びにつながった」という意見があった。

【看護実践セミナー】

(1)臨床場面における認知症高齢者との非言語的コミュニケーションスキルを磨く！

講 師：原沢優子

（名古屋市立大学 看護学部・准教授）

江坂美保（名古屋市立大学 看護学部・助手）

日 時：平成29年9月2日（土）9時30分～16時30分

場 所：名古屋市立大学 看護学部棟 4階 410講義室

募集人数：10名

参加者：5名
参加費：3,000円



〈内容〉

今年度初めてのテーマであり、演習を交えたセミナーを開催した。

臨床看護師を対象に受講者が認知症高齢者とのコミュニケーションを見直し、スキルアップさせることを目的に行った。特に、非言語的コミュニケーションスキルへ焦点を絞り、人と人のコミュニケーションの様相をコミュニケーション学の研究を活用して提示し、さらに認知症高齢者の認知機能低下の論理的な理解、認知症高齢者への看護の方向性を明示した。看護師は、何を伝えればよいのか、認知症高齢者に何が伝わっているのか、を明確にした後、自分自身が伝えたいことを上手く伝えられているかについて、自身の非言語的コミュニケーションをリフレクションした。その後、演習を通して体験的に非言語的コミュニケーションの実践学習をした。

多くの人が、他者とのコミュニケーションにおいて言語的コミュニケーションに留意しているが、非言語的コミュニケーションへの関心は薄い。臨床看護師が認知症高齢者と関わる場面を見たときに非言語的コミュニケーションへの着目が弱いと感じていた。非言語的コミュニケーションは、自身が知っているようであり認識されていないことが多く、本セミナーでは、まず自身が気づくことが第一歩とした。基本的知識の講義をしたあと、臨床看護場面のDVD教材を利用して、看護師の非言語的コミュニケーションとして適切なこと、不適切なことに着目するトレーニング学習を行った。最初は、受講生のほとんどが看護師の非言語的コミュニケーションへの気づきが乏しかったが、1事例ずつ解説を行い、4事例を検討した。受講生は少しずつ、非言語的コミュニケーションへの着目点が増えた。次に、臨床でよくある看護場面を模擬患者に演じてもらい、受講生に看護師として実践してもらった。また、その実践はビデオ撮影して、全員でビデオから各人の非言語的コミュニケーションスキル

を振り返った。非言語的コミュニケーションについて学習したあとであり、多少の意識をもって実践した。

〈アンケート結果〉

参加者5名のうち、5名から回答があった(回収率100%)。セミナー参加動機は「チラシ」「インターネットのホームページ」「その他」の順であった。また、セミナーの内容は参加者全員が「わかりやすかった」という回答であった。自由記載では、「介護士さんにも再確認してもらうために少しずつでも取り入れていきたい」「とても良くわかった」という意見があった。

(2)重篤な肝障害・腎障害・代謝障害の病態と管理

講師：薊 隆文(名古屋市立大学 看護学部・教授)

日時：第1回 平成29年10月20日(金)

18時30分～20時30分

第2回 平成29年10月27日(金)

18時30分～20時30分

第3回 平成29年11月10日(金)

18時30分～20時30分

場所：名古屋市立大学 看護学部棟 4階 410講義室

募集人数：20名

参加者：10月20日(金) 11名、10月27日(金) 11名、
11月10日(金) 8名

参加費：3,000円



〈内容〉

今年度初めてのテーマで3回に分けて開催した。

1) 腎臓の解剖生理と重篤な腎障害の病態と管理

(10月20日)

重篤な腎障害を学ぶうえで必要な基本的な解剖・生理学について概説した。そのうえで急性腎障害は敗血症・急性循環不全を先行疾患とすること、そして治療・管理としては腎機能低下の個々の症状に対する対症療法、人工透析の原理とその実際、そして腎移植について解説した。

2) 肝臓の解剖生理と重篤な肝障害の病態と管理

(10月27日)

重篤な肝障害を学ぶうえで必要な基本的な解剖・生理学について概説した。そのうえで肝不全は劇症肝炎・肝硬変から波及すること、そして治療・管理としては肝機能低下の個々の症状に対する対症療法、血漿交換の原理との実際、そして肝移植について解説した。

3) 糖尿病の病態生理と糖尿病性昏睡・アシドーシスの管理 (11月10日)

糖に対する生体の反応と糖尿病の病態生理について解説した。そのうえで糖尿病昏睡の病態とその治療。またアシドーシスを理解するために酸塩基平衡の考え方と、血液ガス検査から、アシドーシス・アルカローシスの成因を読み取る方法について解説した。

〈アンケート結果〉

最終日参加者 8名のうち、8名から回答があった(回収率100%)。

セミナー参加動機で最も多かったものは「自分の看護のレベルアップ」の5名(62.5%)であった。また、セミナーの内容は「どちらかといえばわかりやすかった」が3名(37.5%)、「どちらかといえば難しかった」が3名(37.5%)で2極化された。「今後にかすことのできる内容であった思う」と回答したものは参加者全員の8名(100%)であり、知識を深め臨床実践に生かすことの出来るセミナーとなった。

(3)患者急変対応開催「何か変、と思ったとき…」

講師：清水真名美、寺澤涼子、加藤紀子、石井房世
(名古屋市立大学病院救急看護・集中ケア認定看護師)

日時：平成29年11月18日(土) 9時30分～16時30分

場所：名古屋市立大学病院 シミュレーションセンター

募集人数：20名

参加者：14名



参加費：3,000円

〈内容〉

例年、参加申し込みが多く好評のセミナーであるため今年度も開催した。

患者が急変する6～8時間前には何らかの兆候がでていっているといわれている。このセミナーでは、受講生が患者の急変前兆候に気づき、医師などに報告することで、防ぎえた心停止・防ぎ得た後遺障害を防ぐことを目的とした。患者急変対応コース for Nurseガイドブックによれば、「急変とは、予測を超えた状態の変化をいい、その程度は観察者の予測範囲によって異なる。一般にはその変化の方向性は、病態(症状)の悪化を意味し、何らかの医療処置を必要とする場合を表現している」と定義されている。私たち看護師がその変化を見逃さないようにするためには、患者の病態変化に気づき、対応の必要性を判断する能力、そして、医師などに迅速かつ適切に報告する能力が求められる。

上記のように急変は観察者の予測範囲によって異なるため、常日頃から急変に備えて観察する能力を向上させる努力が必要である。そして、その能力を用いて患者と接する度に迅速評価を行うことが大切である。迅速評価とは、「最初に出会った数秒間で、呼吸、循環、意識・外見を五感のみを使って、アセスメントする」ことである。そこで必要なことは、患者に「死に結び付く可能性のある危険な兆候」があるのかどうかを判断することである。アセスメントの結果、心肺停止状態と判断した場合、BLSを実施する。心肺停止状態になっていないが、危険な兆候があると判断した場合、ナースコールで応援要請を行いながら、さらに詳しく患者の状態を把握するために一次評価を行っていく。一次評価では、簡単な器具(血圧計、生体情報モニタ、聴診器、ペンライト、体温計)を用いて視診、触診、聴診で、命を支える「A：気道」「B：呼吸」「C：循環」「D：意識」「E：外表・体温」に問題ないか素早く観察を行う。すなわち、患者が心停止にどの程度近づいているかを判断するために、「A・B・C・D・E」の視点で評価するのである。そして、患者の状態を観察しながら、患者に何が起きているのかアセスメントを行い、SBARを用いた報告を医師などに行う。

これらの方法を知り、実践できるようになるために、まず観察のポイントや観察方法を講義で学んだ後、机上シミュレーションを行い、講義内容の理解を深めてもらった。そして、実働シミュレーションで人形を使用し、学んだ内容を実践してもらおうという段階を経て学習するセミナーとした。



〈アンケート結果〉

参加者14名のうち、14名から回答があった（回収率100%）。セミナー参加動機で最も多かったものは「職場の上司の勧め」の11名（78.6%）であった。また、セミナーの内容は、全員が「わかりやすかった」と回答した。自由記載では、「シミュレーションで挙げられた事例の患者は実際どのような状態だったのか知れたら良かった」「受ける前は長いと思ったが、実際に受けてみると、研修時間も十分だった」「今後、意識して、観ていこうと思う」「活かしていきたい」という意見があった。知識に加え、急変事例の観察や判断力の共有、シミュレーション人形を使用した演習の構成により、患者急変時のアセスメントやリーダーとメンバーの役割など、実践に結びつく、非常に好評なセミナーとなった。

2. なごや看護生涯学習公開講演会

担当：益田美津美、小川雅代、吉松由子

「なごや看護生涯学習公開講演会」は、地域の保健医療職者が求めている知識、情報、話題などを提供し、結果として市民の皆様に対する医療の質向上に貢献することを目的としている。その時々医療情勢をふまえてテーマを選定し、その分野で活躍中の講師を招聘し、毎年1回開催している。

1) 事業実施の経緯

時期	内 容
4月	担当者の選出、テーマ提起
5月	テーマと講師選定について検討、交渉 チラシ（案）の作成 講師決定
6月	開催日時決定、会場予約 公文書発送

時期	内 容
7月	チラシ送付先、印刷枚数の検討
8月	封筒宛名印刷 広報なごや11月号掲載依頼 チラシ原稿確認、印刷発注（1200部） チラシ納品、チラシ発送 募集開始（看護実践研究センターホームページで告知開始）
9月	看板、スケジュール案の検討 入試広報課へプレスリリース依頼 講師への最終確認書類の発送
10月	当日のスケジュール、役割分担の確認 アンケート内容の検討 全学部ホームページ告知開始 プレスリリース（名古屋教育医療記者会、名古屋市政記者クラブ）
11月	参加申し込み状況、準備状況 名市大病院前会場案内看板、ステージ講師紹介、アンケート印刷 事前受付リスト、領収書作成 配布資料到着
12月	配布資料の印刷 領収書（事前用・当日用）、釣り銭、金庫、経路表示板等の準備

2) 事業の実施状況

テーマ：エンド・オブ・ライフケア ー病院・在宅でいかに生きるかを支える看護ー

講師：三輪 恭子（よどき医療と介護のまちづくり株式会社 取締役）

日時：平成28年12月8日（金）18時00分～19時30分

場所：名古屋市立大学病院 大ホール

参加費：500円

参加者：97名（講演会関係者含む）

〈内 容〉

エンド・オブ・ライフケアは、がんだけでなく、非がんを含めたあらゆる疾患や症状、苦痛等をもつ人々を対象としたケアを指す。生きる力を引き出し最期までその人らしい生と死を支えるためには、病院だけの看護では限界があり、病院・地域のシームレスなケアが求められている。よどき医療と介護のまちづくり株式会社では、大阪を拠点に地域で暮らすあらゆる人々に対し、「健康」と「暮らし」をキーワードにアプローチしながら、ともに生きるまちづくり、健康なうちから死について考える文化の醸成に取り組まれている。

ご講演では、病院を退院し地域に戻る患者、地域で暮らす人々がいかに生きるかを支えるために、看護師はどのような役割を果たすのか、実際の事例やよどきまちステーションでの取り組みをもとにご説明いただいた。



3) 参加者アンケート結果

参加者85名にアンケート用紙を配布し、81名からアンケートの回答があった（回収率95.3%）。参加者のほとんどは看護師69名（85.2%）であったが、ケアマネージャー、保健師、教員、学生と本講演のテーマを反映した多職種が参加していた。講演内容について、「わかりやすかった」もしくは「どちらかといえばわかりやすかった」と答えた人は72名（88.8%）とわかりやすさについて高い評価が得られた。

以下に、参加者の感想の一部を掲載する。

- ・入院直後より、退院に向けての指導ではなく、調整という点が流れと、何が要点であるかを、再度、認識出来た。
- ・在宅での看護の考え方や、そこに到るまでのポイント、入院前、入院後のアセスメント等詳しく学ぶことができた。
- ・今後、病院でどのように退院支援を行うか、ヒントがえられた。
- ・看護を行う上で優先すべきこと、患者や家族の希望を最大限実現できるためにすることを考えることができた。
- ・地域包括支援病棟、回復期病棟、一般病棟をかかえる病院の中でベッドコントロールしており、地域連携&隊員調整部門との連携をとり、支える看護をしていきたい。

4) 課 題

本年度の開催時期、時間、運営については、開催時期が例年よりやや遅かった。事前申込みは106名の内、当日不参加者が例年より多かったため、開催時期、開始時間などについて検討する必要がある。

アンケートによると来年度の講演会についての希望は、全体では「認知症ケア」35人（43.2%）、「退院支援」24人（29.6%）、「がん看護」30人（37.0%）の順であり、

例年通りの傾向である。ただし、今年度は倫理問題や患者家族の暴言/暴力への対応、政策・看護管理、メンタルヘルスなどの希望者数も例年より多い傾向にあった。これらの結果と自由記載の意見も参考にし、来年度のテーマを選定したい。

3. 地域連携セミナー

担当：脇本寛子、小田嶋裕輝

「地域連携セミナー」は、保健医療福祉関連職種の方々や市民の皆様と連携して取り組むべき社会的な問題を取り上げている。さまざまな立場の人々が一緒に考えることで、解決の糸口や新たな方策の発見につながることを期待している事業である。

1) 事業実施の経緯

時期	内 容
28年12月	テーマと講師の選定、講師との交渉
29年1月	チラシの配布先(案)の検討 会場予約
2月	広報なごや5月号への掲載依頼
3月	チラシ配布先決定 チラシ原稿最終確認、印刷依頼（1,100部）
4月	看護実践研究センターホームページ・全学ホームページで募集開始 チラシ発送 参加者募集開始（FAX、インターネット） 参加申込者への参加の可否連絡 入試広報課へのプレスリリース依頼
5月	当日配布用のアンケート内容・看板の検討 講師へ当日資料等の最終連絡
6月	名古屋教育医療記者会、名古屋市政記者クラブへのプレスリリース 準備状況、参加申し込み状況、当日スケジュール・役割分担の最終確認
7月	事前受付リスト作成開始、領収書発行の依頼 配布資料とアンケートの印刷

2) 事業の実施状況

テーマ：いつまでもおいしく食べるために

－食べること、飲み込むことについて知ろう－

講 師：田佳代氏（名古屋市立大学病院看護部）

日 時：平成29年7月22日（土）13時00分～15時00分

場 所：名古屋市立大学看護学部棟 3階 308講義室

参加費：500円

参加者：96名（講演会関係者含む）

〈内 容〉

「食ること」は、からだに必要な栄養を取るためだけでなく「人生の楽しみ」の一つとなっています。いつまでもおいしく食べたいと思うことは人々の大きな関心事といえます。「食」について考えていただきたく、「食ること（摂食）」「飲み込むこと（嚥下）」のしくみやその支援などを具体的にご講演いただきました。充実した資料と映像、とろみ剤を使用した演習、嚥下体操などの体験を通して、摂食・嚥下に関する知識を具体的に学ぶことができました。今回の地域連携セミナーは、事前申し込みで満員となり、多くの方が出席され、地域の皆様の関心の深さがうかがえました。

3) 参加者アンケート結果

参加者83名のうち、81名から回答があった（回収率97.6%）。参加者の多くは看護職44名（54.3%）であったが、介護福祉士、ケアマネージャーが参加していた。参加動機は「興味関心があった」と答えた人は35人（43.2%）であり、「新しい知識を得る」28名（34.6%）であった」

以下に参加者の感想の一部を掲載する。

- ・体操やトロミ剤を実際に体験することができて分かりやすかった。
- ・自分で体験したり、実際に飲み込む映像がみられて興味深かった。
- ・専門的な部分もあったが、図や動画ありで分かりやすかった。大変貴重なお話を聞いて良かった。
- ・食事前に準備体操が有る事は初めて知った。
- ・5期分類の症状や問題点を再確認して何に注意したらよいか学ぶ事ができた。
- ・摂食・嚥下の講習を受ける機会は多いが、具体例や実際に行う事や今まで知らなかった分かりやすい例えがあり、理解しやすかった。



4) 課 題

本年度の開催時期、時間、運営については、特に問題はなかった。参加者のアンケートによると来年度の講演会についての希望は、「認知症ケア」「退院支援」「メンタルヘルス」などがあり、来年度の参考とする。市民の皆様や保健医療福祉関連で働く皆様が何を求めているのか、頂いた意見を基に反映できるようにテーマを企画していく必要がある。

4. 看護研究サポート

担当：原沢優子、小黒智恵子

看護研究サポートは、看護職者が個人またはグループで行う看護研究に対して、看護学部の教員がそのプロセスや研究成果の発表を支援することを目的としている。臨床の場にフィードバックできる科学的根拠に基づいた看護研究の推進を通して、よりよい看護の提供に貢献することを目指している事業である。

1) 事業実施の経緯

【平成29年度 前期開始 看護研究サポート】

新規6件、継続2件、計8件

時期	内 容
4月	研究の募集開始（案内の発送4/7、ホームページへの掲載4/10） 平成28年度実績のHP掲載
5月	サポートの受講料金・体制の変更案を教授会（5/9）に提案 研究の募集締め切り（5/22） サポート教員の募集開始（5/24） サポート教員の募集締め切り（5/30）
6月	研究チームとサポート教員のマッチング マッチング済み教員から順次、研究サポート開始 第3回運営会議にてテーマと担当教員を報告
7月	市大病院外の受講料金徴収の仕組み改善を 第4回運営会議で提案
8月	サポート状況の中間確認の実施
9、10月	中間確認の結果報告と不具合者対応結果の報告
12月	サポート教員への消耗品利用の再案内
2月	看護研究サポート実績報告書の提出依頼
3月	看護研究サポート実績報告

2) 事業の実施状況

今年度は、サポートの体制と受講料を大幅に変更した。

これまでのコースを2コースに分け、スタンダードコース（10時間）30,000円、ショートコース（5時間）15,000円とした。昨年度までは、1時間×5回程度のサポートを10,000円で実施しており増額となる。理由として、研究初心者には研究計画書立案や分析に時間を要すること、経験者にはポイントのアドバイスが欲しいなどニーズの違いがあり、①ニーズに合致する時間と料金の体制整備が必要という教員からの意見が継続してあること、②昨年度の実態調査結果からサポートは1回1時間以内で実施できないことが多く、延べ10時間程度のサポートが行われている事実が確認されたこと、③サポート料金が他大学に比べて格安であり、サポートの品質が低く見積もられるリスクがあることを踏まえた。今まで通りのサポート体制を持続するため10時間をスタンダードコースとし、5時間をショートコースとした。金額は、これまでの5時間に相当するショートコースを15,000円に増額し、これを基準にスタンダードコースを30,000円と設定した。このほか、初心者の場合、10時間のサポートだけでは研究の実施が難しいため、なごや看護生涯学習セミナーの受講を勧奨するようにサポート教員へも周知した。

今年度の4月案内の応募件数は新規6件（スタンダード3件、ショート3件）、継続2件（スタンダード1件、ショート1件）と昨年度と同数であり、サポートの体制・受講料を変更した影響は特になかった。また、年間サポート予定件数を満たしており10月の募集は行わなかった。8件中、名古屋市立大学病院所属が5件、外部病院が3件であった。12月に新規のショートコース受講者（1件）からの要望でスタンダードコースへの変更があり、最終的には、スタンダードコース5件、ショートコース3件となった。

サポート教員は、研究テーマの専門性に沿って1テーマ1教員の適任者に受諾された。

8月の中間調査において連絡体制の不具合からサポートが進んでいないグループがあることがわかり、解決に向けて体制を整備した。

なお、研究成果の広報について、昨年度の実施修了者から公表の承諾があった2件を新規にHPに公開した。

3) 課題

昨年度の課題であったサポートの受講料金・体制について、本年度は大幅に変更したが、これによる支障はなかった。次年度も継続して新たなニーズに合ったサポートの方法を検討していく必要がある。また、本年度は、ショートコースからスタンダードコースへの変更希望があり、サポート教員の承諾が得られたためスタンダードコースへの変更を行った。研究初心者の場合、サポート

必要量を事前に推量できない可能性があるため、ショートコース担当の教員にはスタンダードコースへの変更が可能であることを伝え、適切なサポートを提供できるよう周知する必要があると思われた。

これまで、市大病院以外の受講生からは教員が受講料を徴収していたが、これに対して体制を変えて欲しいとの要望が教員からあった。次年度は、実践研究センター事務あるいは事務局の委員が初回面接日に訪問して、料金を徴収する予定である。

今年度の課題として昨年度にあげた、サポート期間の変更は、市大病院の研究支援体制を踏まえると必要ないことが分かった。

5. 昭和生涯学習センター共催講座

担当：小川雅代、宮内義明、明石恵子

「昭和生涯学習センター共催講座」は、昭和区との共催で行っている事業であり、本年度で4回目である。市民は大学という普段入ることの出来ない場で、専門的で先進的なことを低額で学ぶことができ、大学としては、学生以外にも学びを提供するという地域貢献ができる事業である。

1) 事業実施の経緯

時期	内 容
4月	昭和生涯学習センター担当者との講座開催方法検討 (実務は指定管理者である名古屋市教育スポーツ協会が担当)
5月	テーマと講師の選定、講師との交渉開始
6月	テーマ、講師、開催日時決定 広報、参加者募集開始(名古屋市教育スポーツ協会担当者)
9月	講師への依頼書発送(名古屋市教育スポーツ協会担当者)
1月	名古屋市教育スポーツ協会担当者と共に使用教室などの最終確認

2) 事業の実施内容

平成29年度後期昭和生涯学習センター事業として、「ストレスと上手につき合うヒント」をテーマとする全4回の講座を実施した。第1回は公開講座であり、参加者は61名であった。2回目以後は有料(受講料：900円)で、受講者は38名であった。また、本年度は、第1回目講師の坪井先生の希望により、看護学部・人間文化研究科共催講座として実施した。昨年度より、講師全員に名古屋市教育委員会から謝金が支払われている。

時期	内 容	講 師
1月26日 14:00-16:00	ストレスのしくみと対処法の基本	坪井裕子（名古屋市立大学大学院人間文化研究科・教授）
2月2日 14:00-16:00	こころの元気の素① ～意識を変えて身体と脳をリラックス！～	池田由紀（名古屋市立大学看護学部・准教授）
2月9日 14:00-16:00	こころの元気の素② ～世代を超えたコミュニケーションを考える～	門間晶子（名古屋市立大学看護学部・教授）
2月16日 14:00-16:00	こころの元気の素③ ～新しい視点の見つけ方～	小川雅代（名古屋市立大学看護学部・講師）



3) 参加者アンケート結果

主催者である昭和生涯学習センターが実施した参加者アンケートの主な結果は、以下の通りである。

第1回公開講座については、参加者61名にアンケート用紙を配布し、48名から回答があった（回収率70.5%）。講座の内容について「たいへんよかった」もしくは「まあまあよかった」と答えた人が46名（95.8%）と高評価であった。参加者の感想の一部を掲載する。

- ・わかりやすく、お話して下さり本当に良かったと思う。
- ・ストレスとうまく付き合うこと、共存することがストレスとうまく付き合うコツなんだなと思った。
- ・ストレスラーにより体にストレス反応が起こるので、気持ちの持ち方、対処法を知り少しでも実行したい。

第2～4回目までの連続講座については、最終日の参加者28名にアンケート用紙を配布し、23名から回答があった（回収率82%）。講座の内容、講師の指導、講座全体の満足度についてほぼ全員が「たいへんよかった」もしくは「まあまあよかった」と回答し、高評価であった。しかし、少数の参加者から思っていた内容と異なっていたとの感想もあった。参加者の感想の一部を掲載する。

- ・自分なりに対処法を考え実践してきたが、「ストレス対処法あれこれ」が参考になった。
- ・ストレスというものが理解でき、その対処方法を教えていただき、生活が楽になった。
- ・最近のストレス環境について、各方面から具体的に提示してあり、その対策内容が思い浮かぶ内容であった。
- ・講義をする先生が全て丁寧でわかり易く説明して頂きよく理解できた。また、お互いの意見を聞くのも楽しかった。

4) 課 題

昭和生涯学習センターの担当者から、今後も共催講座を継続したい旨の申し出があった。市民のニーズに合ったテーマを選定するとともに、看護学部教員の専門性を活かした講座となるよう協力して実施していきたい。

Ⅲ 今後の課題

名古屋市立大学は、公立大学法人として第三期を迎えようとしている。その中期目標では、大学の基本的な理念を「全ての市民が誇りに思う・愛着の持てる大学をめざす」としている。そして、教育・研究・社会貢献における具体的な目標を立て、とりわけ社会貢献活動については、以下のように述べられている。

「名古屋市立大学は、地域に開かれた大学として、広く市民や名古屋市などとの連携を一層強化し、教育研究成果を還元することを通じて、地域や行政の課題解決に寄与する。また、地域の医療の発展に中核的な役割を果たすとともに、生涯にわたる教育の推進に積極的に寄与するなど、知の拠点として全学的に地域社会に貢献する。」

本センターは、名古屋市立大学看護学部と名古屋市立大学病院看護部が行う社会貢献事業の企画・運営の役割を担っており、各事業の実績と課題をふまえて、教育研究成果の還元を通じた地域・行政の課題解決や生涯教育の推進による地域社会への貢献がますます期待される場所である。

一方、名古屋市立大学看護学部では、名古屋市立大学病院看護部とともに、名古屋市内の他機関に協力を求め、学会組織を立ち上げることにした。これまでの経緯を簡単に紹介すると、まず、平成27年10月に策定された看護学部未来プランの一つとして学会創設を掲げた。具体的

な検討は平成28年度からで、センター運営委員会内に4名の学会準備ワーキンググループを設置し、学会設立の趣旨や会則などの検討を始めた。平成29年度にはセンター運営委員1名と看護学部運営委員1名が加わり、6名のワーキンググループで趣意書や発起人、会則、学会誌の発行など学会組織の基盤となる事項を検討し、平成30年4月設立を目指して準備しているところである。このなかでは、これまでセンターが担ってきた研究推進に該当する地域貢献事業の学会組織との共催、看護学部紀要の学会誌への移行・刊行なども検討されている。

以上より、次年度は、第三期中期目標・中期計画をふまえ、教育研究成果の還元、生涯教育の推進を意識した社会貢献事業のあり方を考えるとともに、本センターと学会組織との役割を明確にしていくことが大きな課題である。